いきいき中越っ子展
中越大震災被災学校児童・生徒美術展

丸山　実

写真①

主催　新潟県立近代美術館、新潟日報社

後援　新潟県小学校長会、新潟県中学校長会
中越美術教育研究会、長岡市・古志郡
学校教育研究協議会図工・美術部会

協賛　開隆堂出版株式会社、日本文教出版株式会社、株式会社サクラクレパス、ぺんてる株式会社、㈶日本教育公務員弘済会新潟支部、悠久ライオンズクラブ

協力　新潟大学、上越教育大学、長岡造形大学、新潟県立美術館友の会

1．開催に至るまでの経過

震災発生、休館・企画展の中止

平成16年10月23日午後５時56分、新潟県中越大震災が発生する。その後本震と同様の余震が続く。このように激しい余震が続くということは、未だかつて経験したことがない。館職員の多くが自宅には入れず、車中もしくは避難所生活を強いられた。また、安否の確認をとることが精一杯で、館に来ることすらままならない職員もあった。当然のことながら館は「しばらくの間臨時休館」ということとなった。

そのような状況下、余震が収まるのを待って再開しようと考えていた企画展覧会「蕗谷虹児展」も、震度４～６の余震が続き「中止」の判断が下る。お借りした作品の安全を考えるとき、あの状況下では適切な判断であった。地域にある美術館として「こういう時にこそ地域に何らかの形で貢献できる施設でありたい。」あるいは「美術館だからこそ被災した方々を励ます何かができるのでは」と考えるのだが、そのようなことができる状態ではなかった。

中越地区の子どもたちのために作品展を開催しよう―――地域の人々に支えられて

こうした中、中越地区の子どもたちの作品展が震災のために中止になったという情報が入る。毎年子どもたちが楽しみにしている作品展、美術館がそれにかわるものをやってみようという案が浮上した。まずは、被災した学校も含めてこのような作品展を実施した場合に、実際に「出したい」というニーズがあるのかを電話連絡で調査した。すると多くの学校から「ありがたい」「是非やってもらいたい」という声が寄せられる。

当然のことではあるがこのような事業を実施するための予算もなく、しかも「やってもらいたい」という声は寄せられても具体的に何点ぐらいの作品が出品されるのかが全く読めない。そのような状況で簡単に「実施する」という判断はできない。

そこでまずは「実施できる体制を整える」ところから作業に取りかかることとした。まずは広く地域から協力が得られるよう地元新聞社（新潟日報社）に協賛の協力要請をし、さらに「実施に必要な物品の調達」「作品を台紙に貼り、展示するための人手の確保」などについての交渉を進めた。

交渉は美術教育関係業者、地元ライオンズクラブ、大学、学校関係団体と多岐にわたったが、いずれも非常に協力的だった。一番の問題は、人手の確保だった。或る程度は大学の学生、地元の学校の図工美術の教員のサポートが得られることになっていたが、地域から募るボランティアがどれだけ集まるかが読めない。「実施できる体制を整える」という意味ではここが一番不安な部分であった。

不安な部分もあったが、ある程度実施できる目処が立ったところから「できるだけ早い内に実施できるように動き始めよう」ということになった。このような作品展を実施する場合、本来ならある程度先を見通してから進めていくべきであろう。しかし地域の美術館として、震災という非常時の中にあって、「今しかない」と２月末開催を目標に動き出すこととした。

2004年10月23日に発生した「新潟県中越大震災」。
その被害には目を覆うものがあります。
そこから立ち上がるには大きなエネルギーがいることも確かです。
しかし、そこに「いきいきとした子どもたちの姿がある」
ということを忘れてはなりません。
子どもたちは、未来であり、希望であり、
そして、子どもたちのいきいきとした姿は大人たちを勇気づけます。
こうした「中越地区の子どもたちの姿を見てもらいたい」
という願いを実現すべく、この展覧会を
新潟県立近代美術館で開催することとなりました。
本展覧会は、多くの民間企業の皆さん、先生方、学生の皆さん、
ボランティアの皆さんの協力を得て実現しました。
中越地区の図工・美術が大好きな子どもたちの笑顔があふれるこの展覧会が、
復興へ向けた希望の灯火となることを願ってやみません。
多くの皆様のご来場をお待ちしております。

いきいき中越っ子展
新潟県中越大震災 被災小・中学校美術展
2005年2月9日(水)～27日(日)
入場無料 月曜休館 9:00～17:00
新潟県立近代美術館
主催／新潟県立近代美術館、新潟日報社
後援／新潟県小学校長会、新潟県中学校長会、中越美術教育研究会、長岡市・古志郡学校教育研究協議会図工・美術部会
協賛／新潟倉庫株式会社、日本文教出版株式会社、株式会社サクラクレパス、ぺんてる株式会社、(財)京楽教育公務員弘済会
協力／新潟大学、上越教育大学、長岡造形大学、新潟県立美術館友の会
〒940-2083 新潟県長岡市富岡町字堂橋甲278-14
TEL. 0258-28-4111(代) FAX. 0258-28-4115
JR長岡駅大手口徒歩20分(全国電ワイ駅)JR石内駅西口下車
関越・北陸自動車道長岡ICより徒歩8分(長岡市街方面へ約15分)

このようなチラシを作り、作品展の趣旨を伝えた。　資料①

準備期間も少なく様々の他の業務も滞らせるわけにはいかない中、募集要項の作成・配布・協力要請・ボランティア募集・展覧会広報と多岐にわたる業務を、館員全員の協力の下、一気に進めた。

実際に作業に取りかかると、いくつかの問題点が見えてきた。何回かやっている作品展であれば出品される数やそれに応じた展示に必要なスペース等、ある程度予測もでき、そのためにどのような準備をしていけばよいかも分かる。ところが、この作品展の場合は今回限りの作品展であり、だいたいの目安となる過去の実績がまったくない。そのため、おおよそどれくらいの作品が集まるのかをまずは把握しなければならないということが見えてきた。実際に作品が搬入される前に、何点ぐらい出品していただけるのかを把握し、それら作品をすべて展示するためにはどのような準備が必要かをある程度見当をつけておかなければならない。そのために出品希望をとるという手間が一つ増えた。

2．展示・会期中の様子

3,500点を超える作品の展示――133名のボランティアの力で

要項を配布し出品希望が集まり出すと、予想をはるかに上回る出品希望があり、とてもこのままでは展示が不可能であることが分かる。

出品希望の事前調査票からは、出品点数は3,500点を超えるということが分かった。そこから展示に必要な壁面、必要物品を割り出す。すると館内の展示可能壁面をすべて使っても、明らかに展示する

ためのスペースが足りないということが分かった。そこで市内の施設から展示用のパネルを借用できないか交渉した。開催の趣旨を伝えると、その施設が震災で大きな被害を受け、使用できない状態だったため、パネルを無償で貸し出してくれることとなった。しかし、それらのパネルを使用しても、展示できる点数ではない。様々の手だてを考えたが「何としても出品された子どもたちの作品すべてを展示する」事を最優先に考え、「展覧会の会期を３つにわけ、展示替えをして対応しよう」という結論に達した。会期を３つに分けるということはそのためにさらに手間と人手がかかる。「人手の確保」という一番不安な部分がさらに心配材料として膨らむ判断だった。

市内の施設から無償で借りたパネルを学生が運ぶ。　写真②

被災された方もボランティアとしてご協力していただいた。　写真③

各学校に会期を３つに分けて展示することをFAXで伝える。同時に、３つの会期にどのように学校を振り分けて展示するかの計画を立てた。またそれに併せて展示のためのボランティアの動きも考え、ボランティアを募集することとした。

実際に作品が搬入され、台紙貼り等の展示へ向けた作業が始まる。この時、一般のボランティアの皆さん39名が参加した。その多くの方々が、ご自身も被災されている方々であったが、この時集まったボランティアの皆さんが中心となって展覧会準備が進められていくこととなる。近隣の大学からもボランティアが駆けつける。主に若い学生からは力仕事となるパネルの運搬や、観覧された方々と共に作り上げる「生命の木」ワークショップの準備などにあたってもらう。そして、展示作業には地元の図工・美術の教員の皆さん52名に３つの会期に分かれてご協力いただくこととした。

展覧会会期とその会期に展示された地域は以下の通りである。

※下期の市・町・村名は、平成17年２月現在のもの。

第１会期　２月９日(水)～２月13日(日)

三条市、見附市、南蒲原郡、三島郡、刈羽郡、山古志村

第２会期　２月16日(水)～２月20日(日)

魚沼市、南魚沼市、十日町市、中魚沼郡、湯沢町、塩沢町、川口町

第３会期　２月23日㈬～２月27日㈰
長岡市、小千谷市、柏崎市、栃尾市

上記のように地域ごとに３つの会期に分けて展示した。その際、震災被災地ばかりではなく、先の７・13水害において大きな被害が出た三条・見附の学校からも出品していただいた。

会場の様子

(1)　中越の子どもたちの作品

P16の資料①のようなチラシを中越地区の学校・公共施設・報道機関等に配布した。テレビ・ラジオ・新聞等各メディアからも取り上げられたこともあり、記録的な大雪にもかかわらず３つの会期をあわせて計7,249名もの皆さんにご観覧いただいた。

被災地の子どもたちの作品に見入る。　写真④

展示された作品の中には、被災し、自分の家に戻れないばかりか、自分の住んでいた地域に戻ることすらできなくなったような子どもたちの作品も並ぶ。しかし、出品された子どもたちの作品からは元気な子どもたちの様子が伝わってくる。

地震以前に描かれた作品だろうか、何気ない教室の一角を丁寧に描いた作品があった。山古志中学校の生徒の作品であった。この作品に描かれた教室にはこの子どもたちは戻ることはないであろう。この作品の前で涙ぐまれていた人たちも多い。皆、大なり小なり震災の被害を受け、さらに厳しい境遇にある同じ地域に住む子どもたちのことを思うと涙が込み上げてくるのであろう。大人ばかりではなく子どもたちは大人以上に傷つき不安になっているのかもしれない。しかし、絵を描き工作をつくる子どもたちはとても明るく、楽しそうだ。

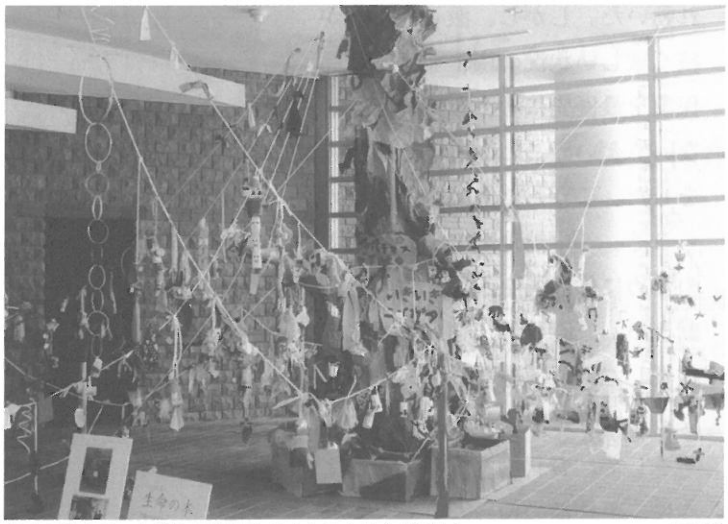
本作品展は無審査で、「出したい」という子どもたちの作品はすべて飾られた。そのことが大きな意味をもった。本展覧会のチラシに「いきいきとした子どもたちの姿があるということを忘れてはなりません」と記したとおり、審査というフィルターを通さない子どもたちのありのままの姿が並ぶ。何気ない子どもの表現の中にある「絵を描いたり、工作をしたりすることの楽しさ」そんな子どもたちの無邪気な姿。そのかけがえの子どもたち一人一人のいきいきとした姿を目の当たりにした大人は、子どもたちから逆にエネルギーをもらったのではないだろうか。

(2)　「生命の木」ワークショップ

また、作品展示と同時にワークショップ「生命の木」も会場の一角で行われた。多くの観覧に来られた親子が、写真⑤(次頁) のように木を模して作られた枝や蔓に、用意された様々な素材を用いて作ったものをぶら下げたり、直に付けたりしながら、参加した人の手で「生命の木」を育てて

いくというものである。

会期末には写真のような大樹となり密林のように縦横に枝が張り巡らされるようになっていった。この「いきいき中越っ子展」自体も多くの人々のつながりで実施に漕ぎ着けたが、「生命の木」はそれを象徴するかのように、会場を訪れた多くの人々の手によるオブジェで、幹だけだった木を大樹に育て上げた。



多くの方々のつながりで「生命の木」は大きく成長した。　写真⑤

(3) 被災地の写真展

子どもたちの作品とともに、震災被災地の状況を記録した写真コーナーを新潟日報社の協力を得て設けた。山古志・小千谷・川口など大きな被害を受けた地域の子どもたちの作品も多い。しかし子どもたちの作品は元気で明るい。こうした写真パネルで被災地域の現状をもう一度理解した上で、子どもたちの作品を見ると、違った意味を持って見えてくるのではないかと考え、このコーナーを設けた。

被災地の記録写真に見入る人たち。　写真⑥

ほぼこうしたねらい通りの反応だったように思われる。実際に多くの観覧者が足を止め、写真パネルに見入っていたし、さらに自分の地域の子どもたちばかりではなく、被害にあった地域の子どもたちの作品も熱心に鑑賞されていた。

3.「いきいき中越っ子展」を実施して

震度5の余震が続く中、企画展覧会も中止せざるを得ない状況となり、展覧会中止の案内を入口に設置している時のことである。「こんな時（余震がつづく）だから、気を紛らわしに来た」という方が来館された。臨時休館に至った事情を説明すると「そうですよね」とすぐに納得され、お帰りになった。やむを得ない状況ではあったが、「大きな地震にみまわれ、傷ついた中越地域の方々のために何かできないものか」と考えさせられる出来事だった。

企画展中止を決めた話し合いでも「作品の保護」と「地域の美術館としての役割」という狭間で揺

れ動いた。しかし、激しい余震が続く厳しい状況の中、今は「作品保護を最優先に考えなければならない」ということから中止の決定をした。こうした経過があったからこそ、「中越地域の子どもたちのために作品展を実施しよう」と動き出した時には、逆に作品展を推進していく大きなエネルギーとなったように思われる。

そして、資料の写真にもあるように、美術館のゆったりとした空間を、自立式の簡易パネルを持ち込むなどして子どもたちの作品で埋め尽くす。このような美術館の使い方をするなどということは、通常であれば考えもしなかったことだろう。それが「いきいき中越っ子展」の趣旨である「すべての子どもたちの作品を展示する」が優先され、館内の様子を一変させてしまった。

所狭しと子どもたちの作品が並ぶ。　写真⑦

変わったのは館内の風景だけではない。「130名を越えるボランティアが関わって準備を進めたということ」「予算ゼロの中、様々の団体・企業から台紙の提供、ボランティアやパネルの輸送、広告記事の掲載といった無償協力に支えられて進められたこと」などもこれまでにはなかったこととして上げられる。

これらのことは、いずれも通常であれば考えにくいことばかりだが、この作品展の趣旨に共感され、協力が得られた。震災という非常時の中であったからこそ、こうしたことが可能となったということは確かに大きい。しかし、このような非常時だからこそ、美術館が一つになって地域のために力を発揮できたということは、館として大きな意味を持ったことのように思う。